

7²⁰⁰⁷
July

支部便り みつわ会東北支部



梨の木のすくと庭に実の五つ 爽風

夏至と梅雨が同時にやってきました。憂鬱な空と裏腹に、木々は嬉々として季節を満喫していて羨ましいほどに元気です。

運動と睡眠に心がけて、今年の夏を乗り切りたいものです。

長井照子さんが、昨年のクリスマスプレゼントに引き続き、もう一つの作品を優太君に手渡すために優太君宅を訪れました。その手記を今回掲載させていただきました。

7月の行事

幹事会 7月11日(水) 4時～

「例会登録会員」のルールが、若干誤解を招くケースもあるので、場合によっては廃止の方向も視野に入れて検討し、結果を9月支部便りで案内することとする。

7月夕食会 7月26日(木) 5時～

「麺飯甜」仙台駅1階 722-2801

登録会員もそうでない方も関係なく、

「今回は出席の方だけ連絡」をして下さい

7月20日(金)までに木村さんまで。 227-2131

7月21日(土)みちのく麻雀

7月25日(水)みちのくカラオケ



白井さん

8月は行事、支部便り、お休みです。

優太君と・・・ 長井 照子

「もう帰るの？」優太君が言いました。そう問いかけて見上げる瞳がいじらしくて、幾度も座り直して優太君と遊びました。

初めて会った優太君はとても人懐こくて元気な男の子でした。

去る5月26日、仙台から新潟へそして関越道を南へ、魚沼市に住む優太君に「新

潟中越地震、真優ちゃんに捧ぐ翼の折れたエンジェル」を届けに行って来ました。

昨年12月にお送りした「再び真優ちゃんに捧ぐ」は立派なケースに収められて床の間に、その上に幼い真優ちゃんの写真が飾られて居ました。

同じ部屋のご仏壇や真優ちゃん人形にお

茶が供えて有りました。

優太君のお爺ちゃん、お婆ちゃんの一日は温か～いお茶をお供えし、ご仏壇に手を合わせる事から始まるそのお姿が目には浮かぶようでした。

私の未熟な人形もこのように大切にしている事が有難くて胸が熱くなりました。

私は真優ちゃん人形を作りながらいつも語りかけて居ました。

「完成したらきっとお爺ちゃん、お婆ちゃんのお家に帰ろうね」と。

そして私の念願が叶い多くの方々のご協力を頂き、二作とも無事に皆川様宅にお届け出来て、私の真優ちゃん、貴子さんへの鎮魂の想いはひと区切をさせて頂きました。

真優ちゃん母子は私達に大きな教訓を残して下さいました。

生きたくても逝かねばならなかったご無念を。

今死に急ぐ人の多い現実の中で決して再生する事の出来ない生命の尊さを再認識する事を。

貴子さんの遺作となった硝子のグラスを見せて頂きました。毎晩のように子供たちを寝かせてから工具を握り、切り子の繊細な絵模様を彫って居た貴子さんのお姿を今も忘れられないと話しながら、お婆ちゃんはそのグラスを愛しむように両手で包んで居らっしゃいました。

朝元気を出かけて行ったのにまさか？とあの日から皆川家の時が止まってしまったかのように、今も貴子さんと可愛かった真

優ちゃんの幻を心の中に手を伸ばせば掴めそうな塵気楼を追い求めて居られるようなお婆ちゃんのお姿に心打たれ、おかけする言葉も見つけれませんでした。

お爺ちゃんのお手紙に「4歳までも生きられなかった真優、この世に生きた証しも残せなかった真優」と有りましたが、新潟から遠く離れた仙台の地で真優ちゃんの生きられた証しを私も受け止めました。

地震のニュースをテレビで見ながら、会った事もない真優ちゃんでしたが、何とかして形に残さなければとの想いが日増に募り、試行錯誤を繰り返し未熟ながらも完成する事が出来たのは、ひたすら真優ちゃんへの想いでした。

そして先月愛らしい真優ちゃんの写真と対面致しました。

優太君は太陽のように明るく元気に成長され、お爺ちゃん、お婆ちゃんの下に宝の少年のようでした。

さよならをする時、見えなくなる迄手を振って送ってくれました。

有難う優太く～ん、さわやかな5月の風の吹く午後でした。

2007.6.14



長井さんご夫妻と優太君

日新火災と私

葛西洋一

～不思議なご縁のあった人達～

「人は生まれた時から赤い糸で結ばれている」演歌の世界ではないが、そんな気のする人達をご紹介します。

(一) 若松英子さん(元青森.営業所社員)

私は昭和6年青森県東津軽郡筒井村というところで生まれたが、物心のつく頃は同じ筒井村の奥野というところで育った。昔お世話になった隣人ということで母に連れられていったのが若松さん宅である。近くには陸軍歩兵五連隊(現青森高校)があった。支店の十和田旅行の帰りに青森に立ち寄りお会いしたが、二人とも幼い頃で記憶はなかった。彼女はお兄さんが東海のプロ代理店ということで、東海の社員と結婚し、会社はすぐやめたらしい。翌年の社員名簿には載っていない。



(二) 西谷諭一さん(仙台業務、本社総務)のお義母さんの石沢さん。

昭和29年入社であるが、家の近所の米ヶ袋広丁に会社の集合社宅があり、ご挨拶に伺ったところ、同居しておられたお義母さんとお会いした。私が青森生まれで仙台に来るまで青森幼稚園にいたことを話すと、今(こん)園長は弘前女学校時代の組主任であったとかで、それから親しくしていただき、色々とお世話になった。

(三) 菅井彰さん(現東北支部会員)

新入社員の顔合わせの際、応接室でお会いして驚いた。小学校の同級生である。私は仙台ではじめて住んだのが土樋で、すぐ荒町小学校に入学した。3年生になったとき組主任が別の先生に変わったが、この先生中学教師の資格をとるためによく講習に出かけることが多く、約60名の仲間はその都度他の4クラスに分けられた。私が分けられたクラスにいたのが菅井さんで、彼の当時の家は私の帰る通用門の前あたりにあり、時々立ち寄っては休ませてもらった。

こんなことがあった。菅井さんからの帰路、犬がついてきて何度追っても帰らない。その筈、お母さんから頂いたケーキを紙袋に入れてぶら下げていたが、犬がそれを欲しがっていたのだ。その後、私の職場のアルバイトに弟さんの剛さんがきて、しばし旧交を温めたこともあった。

(四) マルカン豆本舗

私は大学在学中、ずっとマルカン一族(マルカン商事、渡辺製菓等)の子供さんの家庭教師をしていた。駅前の大火の際、創業者の義弟にあたる三木さん(仙台三木代理店)を通して当社に保険が付保されていたことを知ったが、早く判ればコネとして利用出来たのにと、苦しい就職活動を思い返して残念だったがあとの祭りであった。その後、会社自体が日火の代理店をするという情報があり、当時の福原次長、佐藤尚義主査と同行したが、社長(創業者の孫)がなかなか会ってくれず、漸く社長のお母さんの口利きでお会い出来たが、結果は駄目だった。

(五) 渡辺ふみよさん(仙台・総務 平成 16 年死去)

前にも書いたが、学生時代演劇部に所属していた私は、片平町の部室で昼食をとり、番ブラと称して一番丁を三越まで上がり、帰ってきて最後は中央市場(現いろは横丁)の奥にある「ぜんざい屋」で餅の入っていないぜんざいを食べ、南町通りの家に帰るといいう日課を繰り返していたが、途中で必ずお会いする方がいた。その方が渡辺ふみよさんだった。買い物袋をぶら下げ、本当に目立つ方だった。



時折同僚らしい方が一緒だったこともあり、会社に入ってみてその方々が庄司きみ子さん(仙台・総務 現東北支部会員)、藤本カツさん(仙台・総務 平成 16 年死去)であることを知った。

北海道に初夏の花が咲いていました。



イングリッシュブルーベル
(札幌滝野スズラン公園)



キングサリ
(札幌百合ヶ原公園)



ハクサンチドリ
(オホーツクベニヤ原生花園)



ルピナス
(ニセコ)